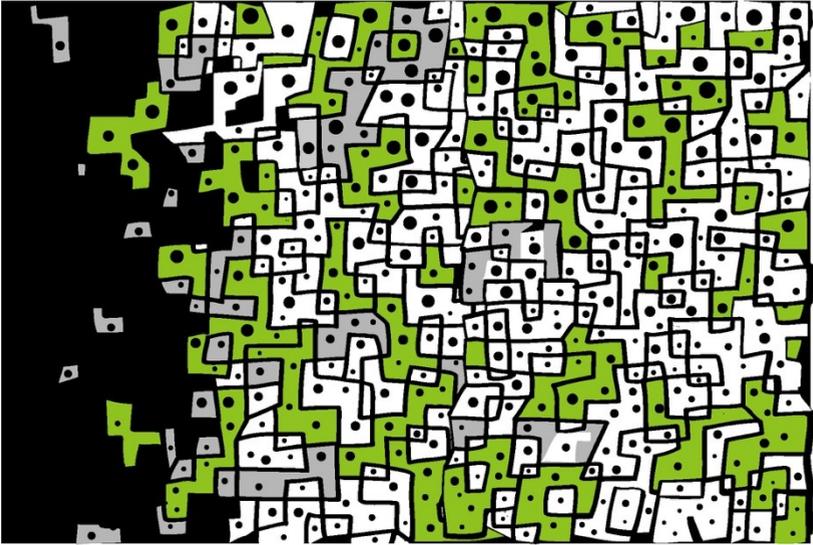


詩誌 立彩

Rissai: A Journal of Poems



第 21 号

2022 年 3 月

目次

伊東友乃

春のまえ
家 4 2

関根全宏

アウトサイダー
新築九区画 8 6

山本早紀

夢 10 11

前田希歩

冬の温もり
わたしの秋 12 11

永松佑香

僕の愛するひとは
僕の勝てないもの 15 14

真野珠希

厄介者 16
拝啓、憧れ 17
とある大学生のつぶやき 18
とある大学生の朝 20

田嶋奏子

ぼくのおもいで 22
クリーム色 24

渡辺信二

新桃太郎秘話 25

表紙原画

鈴木順三

「春になれば・1」(表紙)
「春になれば・2」(裏表紙)

春のまえ

伊東友乃

思うに

いつだって春のまえだ
やさしい人が亡くなるのは

緑のいぶきが
そこらじゅうに
たちこめるまえに

あたたかさにむかって
心が傾きはじまるまえに

うす青い春の空を見あげるまえに
亡くなってしまふ

春がせめてもうすこし
深まれば

悲しみは
溶けやすくなっただろうか

そのかわり
春のまえの透明さが
ひとときの固体となって

そしてそれは
やさしい人の記憶そのもので
溶けることのないかけら

家

伊東友乃

扉を変えて
窓枠を変えて
どのだれにも似ていない
そんなきらきらとした暮らしをしたいのだけれど

わたしの家には
幾千もの無数の穴があいていて
時たま屋根のほうから
大きなねずみが潜ってきたりする

こだわりすぎて
使えなかつた
戸棚も椅子も
時間とともに
木だけは良いあんばいになって
のぞき込めば
そこにも無数の穴

きらきらとした

時間の粒が

とおくのだれかの家に
つづいて行って

触れば

指にひとすじのひかり

アウトサイダー

関根全宏

煌々とした街のなかで
僕がいるところだけが
膜で覆われている
いっどこにいたって
そうなんだ
僕は常に内側にいる

外側ではいつも
僕の知らない人たちが喋っている
車が行き交う
遠くから電車の音が聞こえる
木の葉が擦れる
道路工事の光が眩しい

内側からは死んだあの人の声がする
でも 僕の周りにはある空気は震えない
夏の日 あの人が死んだとき
僕らが抱擁した感覚が

今でもこの皮膚に残っている

表面張力が破られ

横隔膜を震わせ

拳を握ったあの感覚も

また 木の葉が擦れる

僕らはみんな

目的をもって動いている

僕は今日も

明かりが消えた家に戻る

新築九区画

関根全宏

キャベツ畑の向こう側に
新しく建った家が見える
テニスコートほどの裏手には
裸の木がきれいに立ち並んでいる

その先にあつた古いアパートは
つい先日取り壊され
一瞬で更地になった
思いのほか大きなアパートだった

重い荷物を持ち直しながら
ぼくは彼女にそのことを教えた
彼女はただ頷き
石ころを蹴飛ばすと
それは不規則に飛び跳ね
側溝に落ちていった

それはぼくたちふたりの命のようだった

一年前の今日

彼女の涙に祝福された命

曲線を描きながら

ふわふわと飛んで消えていった

風船のような異物

キャベツ畑の向こう側に

新しく九軒の家が建った

彼女はまだ見ていなかった

その新しい住人を

その先にあつたアパートの跡地を

夢

山本早紀

手のひらに収まる小さな画面に
終わりなく続く異国の景色
僕はまだ夢見ている

目をつむると広がるのは
大きな空 広大な土地
吹き抜ける風に髪が躍る

叶えたい夢はいつの間にか
眠って見るものに変わっていた
世界の門は閉ざされた

世界がまた元通りになるまでは
僕は夢でいいからと祈って
夢の世界でまた夢見るのだ

冬の温もり

前田希歩

(※作者に電子版への掲載許可が取れないため空白)

わたしの秋

前田希歩

(※作者に電子版への掲載許可が取れないため空白)

僕の愛するひとは

永松佑香

僕の想いびとは
ガラス玉の青い目

僕の重いびとは
巻き毛のブロンドヘア

そんな冷たい君は
僕の膝の上

麗しい月夜の窓辺を眺めて
壁につたうアイビーを眺めて

おやすみなさい
今宵も

動かない君を抱いて寝る

僕の勝てないもの

永松佑香

僕には唯一勝てないことがある

それは突然やってくる

体は沈み

瞼は重くなる

その瞬間僕は格闘する

暗闇に落ちていかないように

必死に耐える

けれど――

瞼を開ければ周りは明るくなっていて

僕を絶望に陥れる

まさに悪魔的な存在

これが僕の勝てないもの

厄介者

永松佑香

だれかの視線を感じる

その目は醜いものを見ているかのような目だった

何も悪いことはしていない

動いているだけだ

生きているだけだ

ちよつと見た目が醜いだけ

誰かが言った

お前は厄介者だ、と

また誰かは指を指して悲鳴をあげる

化け物を見たかのように

だから僕は逃げる

捕まらないように

今日も生きる場所を探しに行く

拝啓、憧れ

真野珠希

体育で削れた今日の体力

ねぼけまなこで弁当を食べる

流れ込む風に塩素の匂いが混じり合う

あくびを噛み殺す

次の授業はなんだっけ

ロッカールームから外を眺める

道ゆく人物に既視感

あいつ、またサボるのか

癖というものは治らない

白昼堂々、まるで散歩している人のように

外にいるはずのない制服が通学路を闊歩する

何を考えているのか

昔からの付き合いなのに

自由を求める抵抗と勇氣

小さな尊敬と普遍的な軽蔑をため息に変えて

教室に戻った

とある大学生のつぶやき

真野珠希

気づけば二時半

机は散乱

課題は進まん

明日の朝にはきつと狂乱

夜更かしのお供は生配信

レポートのテーマは作品論

インスタばかり即更新

重い腰あげてパソコンON

お肌は荒れぎみ

思わずため息

お布団ははずこ

眠気にシフト

何か良いことないかな

明日はきつと良い日になるよ

効率悪くなるキーボード
こんな夜も悪くない

かも？

とある大学生の朝

真野珠希

おはよう月曜

早起き成功

少しは成長？

早速始めよう課題の推敲

提出期限まであと三時間

これが終われば決めよう一蘭

最後まで抜かりなく確認

余裕を持って `manaba` にログイン

まさかの事態

画面が動かない

思わぬエラー

気分はクレーマー

落ち着け自分

再起動しよう

もしものための時間配分

どうせよくあるエラーだろう

あ、提出できた

解散！

ぼくのおもいで

田嶋奏子

小さな光が見える
どこに連れていかれるんだろう
不安を抱えながら着いた先は
ぼくにとって温かい場所

茶色いおうち
オレンジの毛布
ぼくの寢床は前よりずっと
広くなった

おともだちも連れてきた
だけどちよつと疲れたみたい
新しいおともだちと遊びなさいって
新しいお母さんは言った

どこまでも続く緑の上を
走り回ったこともある
そしたらみんな笑ってくれた

それがぼくも嬉しかった

ぼくは何も見えなくなつた

怖くて仕方なくて

何度も叫んだ

でもみんながそばにいてくれる

ぼくはこれからも

おもいでをつくる

クリーム色

田嶋奏子

疲れた顔して
ぼろぼろの服着て
でも確かにそこに立って
今日も守ってくれてるあなた

いつからここにいるの？
と私が尋ねると
ずっとずっと前からだよ
とあなたは言った

私があるから離れるとき
先生から聞いたんだ
ほんとにずっとずっと
前なんだってね

もうすぐあなたは
その役目を終える
守る立場から
守られる立場へ

新桃太郎秘話*

渡辺信二

ここは生きるだけでも大変な国

思索や反省の余裕がありません

国家目標　みんな仲良く一つの家族

人生目標　長生きコロリ

生活目標　精をつける

なので　お尻を左右に開いてご覧

ほら　兆が木となる桃は　精をつけるから

おばあさん　がりり　がりりと齧り付きます

おじいさんは　芝刈り*のブービー賞品

メンズサプリーを5錠　ゴックリします

「おまえは　今夜　特に素敵だ

昔みたいに　むだいて　うだいて

スパンキング・・・」

「ま　おじいさん　その歳で」

「夫婦も含めて　全てが無情　全てが名残り」

ご存知でしょうが、嗜好一致が
結婚継続に一番大事です
果たして、兆して、二人は、めでたし
おじいさんおばあさんから
お父さんお母さんとなる

生まれた子どもを、桃太郎と名づけ
大事に育てた、強く育てた

「それで、鬼を退治したいって？」

「鬼は、私たちの宝を掠め取りました
復讐し取り返したい」

「そうか、それなら、行くがいい

ほら、イザナミも、鬼から命を守るに

桃を使った、お前が海の神兵***であつても

命が第一、いいか、死ぬな、敵は、背中から襲え」

「はい、では、鬼の退治に出かけます」

「さる(猿)ことを、生地(きじい雉)丸出しで
でっち上げ、犬も棒で鬼を殴り殺す」*

退治の理由は、何でも良かったが

自衛や報復ならば

この上ない口実だった

腰につけたは

日本一のきびだんご 精がつくらしい

家来たちは皆 鬼ヶ島で

正々堂々 男鬼を背中から襲い

女鬼をお尻から辱めた***

でも 鬼の悪いはずはありません

鬼は大陸では霊であり 魂なのですし

私たちは皆 鬼籍に入りますが

この辺境の地では 長生き第一

死を恐れ 死の征伐に擬し 鬼を払います

鬼の子ども「ねえ おじさん

ぼくの目の前で お父さんお母さんが

桃太郎というやつに殺されました」****

私「そうなのか 御免ね ぼく

あの後 桃太郎は 領海侵犯で

任意の事情聴取 受けたしき
それにおじさんが最初に おじいさん
おばあさん と言ったけど でも
あの二人 おじさんと血のつながりは
全然無いんだ 悪いね」

注

* 小池藤五郎「古文獻を基礎とした桃太郎説話の研究上」立正大学文学部論叢 (26), 3-39, 1967-03

参照。

** 昭和の頃、ゴルフの隠語である。説話中では「柴刈り」であらう。

** 映画『桃太郎海の神兵』松竹、1945。 <https://www.shochiku.co.jp/cinema/database/02392/>

*** 芥川龍之介「桃太郎」青空文庫 https://www.aozora.gr.jp/cards/000879/files/100_15253.html

**** 山崎博司・小畑茜「めでたし、めでたし。」2013年度「新聞広告タリエーティブコメント」

最優秀賞 <https://www.pressnet.or.jp/adarc/adc/2013.html>

2021年9月1日以降に贈られた詩誌

『白亜紀』161号。

『万河・Banga』26号。

『コールサック』107号、108号。

詩集

田中伸治『琥珀のラビリンス』コールサック社、2021年。

その他書籍・論文・エッセイなど

『英米文学手帖』関西英米文学研究会、第59号。

堀内正規『ジョン・レノンをたたえて：life as experiment』小鳥遊書房、2021年。



詩誌『立彩』第 21 号 2022 年 3 月 20 日発行

頒価 300 円

編集発行 「立彩」

〒173-8602 東京都板橋区加賀 1-18-1

東京家政大学人文学部 関根全宏研究室気付

印刷 株式会社 DTP 出版 TEL 03-5621-4531